OUKA
Osaka University Knowledge Archive

Title	Postmodern Metamorphosis : Capitalism and the Subject in Contemporary American Fiction
Author(s)	石割, 隆喜
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41325
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

【5】

氏名	石割隆喜（いしわりたかよし）
博士の専攻分野の名称	博士（文学）
学位記番号	第 14316 号
学位授与年月日	平成11年3月25日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 文学研究科英文学専攻
学位論文名	Postmodern Metamorphosis : Capitalism and the Subject in Contemporary American Fiction （「ポストモダン的変身――現代アメリカ小説における資本主義と主体」）
論文審査委員	（主査） 教授 石田 久 （副査） 教授 玉井 暲　教授 林 正則　助教授 森岡 裕一

論文内容の要旨

本論文は，ポストモダニズムと称される後期資本主義的文化を生きる主体を特徴づけるものは「変身」であるとする立場から，四つの現代アメリカ小説を読もうとするものである。その際，肖像写真家の実践を併置することで，ポストモダン的主体の「変身」をパフォーマンスとの関連においてとらえ、“formation”（主体形成）と“deformation”（主体の変形，「奇形・異形化」）の二つの型を提示する。そして，この「パフォーマンスする主体」の中に，批判と異議申し立てを可能にする力の存在を探ることを目的とする。

第一章では，Thomas Pynchon の *The Crying of Lot 49* の中に読み取れる監禁された女性のイメージを，Sacher-Masoch の小説や Sherman と Spence による肖像写真と併置することで，主人公エディパの探求の発端にある遺言執行行為がマゾヒズムに内在する力関係のひとつの表れであり，エディパの限界は，被監禁者がふたたび自らを監禁することで，男性中心的資本主義の文化的言説を可視のものにするシャーマン，スペンスらの営為に対して盲目である点に求められるとする。

第二章では，Robert Coover の *The Universal Baseball Association* を虚構創造のプロセスとしてではなく，その結果，作者である一人の白人男性が，アメリカを成立させている二大要素－資本主義的経済とホモソーシャル的父権性の論理によって排除される点に注目し，彼の追放の中に批判する主体たるべき女性主体（たとえば女性写真家のホルツァー）誕生の契機すら見いだすべきだと主張する。

第三章では，Donald Barthelme の *The Dead Father* を，死父の身体の「物質性」を葬り去ろうとする「摩擦」消去の埋葬物語としてのみならず，小説というメディアそのものが市場の論理に難なく取り込まれることのアレゴリーとしても読まれなければならないと論じている。

第四章では，Don DeLillo の *White Noise* に読み取れる「死の恐怖」を，文彩（‘figure’）の流通が禁止された結果生じる死の一義的意味の硬直化を原因とする，本質的に修辞的な病として再解釈し，死の表象をめぐる文化的抑圧・序列化の構造とタナトフォビアとの因果関係が，作品の描くアメリカにおいて決定的に不可視である点を論じる。

以上をうけて，本論文は，後期資本主義的文化において「残余的」な表現媒体になった小説ジャンルの中に，変身する主体ならびにそれが属する「サブカルチャー」がいかに誕生しているかを探ることこそ，ポストモダンアメリカ小説を読む者の責務であると結んでいる。

論文審査の結果の要旨

ポストモダン小説については従来その技法的，テクスト的側面が主として研究されてきたが，本論文は「主体」の問題を中心に据え，作品分析を通じて，各々のキャラクターが生きるポストモダン文化の中で彼（女）らがいかに位置づけられているかを考究するという，広い意味で文化研究の色彩の濃い論文である。そのために導入した肖像写真の分析は興味深い視点を提供しているが，むろん，そのために犠牲になった側面，たとえば，文学テクストプロパーの分析と文化に関する言及とにアンバランスが生じ，作品自体が文化コンテクストの中に吸収，埋没させられているとの印象を与えている点は問題であろう。また，周到な理論武装がかえってタームの理解に混乱を招きかねない記述のありようは改善の余地がある。とはいうものの，本論文が，難解なアメリカの代表的ポストモダン小説を読みこなし，それらに通底する中心的主題を「主体」という統一的観点から整理することに成功していることはまちがいない。また，関連する現代思想の成果を咀嚼，応用する力量はめざましく，本論文は学界に新鮮な刺激を与え相当の寄与をなすものと思われる。よって，本審査委員会は，本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしい内容を有するものと認定する。